

令和元年6月3日現在

機関番号：32517

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K03229

研究課題名(和文) 民俗文化の継承におけるコストとモチベーションに関する基礎的研究

研究課題名(英文) Basic Research on the Costs and Motivations of Transmitting Folk Culture

研究代表者

石本 敏也 (ISHIMOTO, Toshiya)

聖徳大学・文学部・准教授

研究者番号：00406745

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、民俗文化をその担い手に種々の負担を強いるコストとして把握し、コストとモチベーションという観点から実態を捉え直すと共に、その調整過程を明らかにしようとするものである。

研究成果として『民俗文化の継承におけるコストとモチベーションに関する基礎的研究』と、資料集『百万遍人別帳 津川町下田町人別・諸掛表 寛政十一年～慶応四年』を作成し、民俗の担い手にとり民俗文化の遂行は多大なコストを伴うことを改めて確認し、他方それをモチベーションに変換し継承を遂行する場合があることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、民俗文化を当事者に種々の負担を強いるコストとして把握し、そのコストと民俗文化を遂行するモチベーションの、調整過程から成る民俗文化の継承を明らかにしたものである。民俗文化に関して近年では文化資源や観光の文脈で注目されてきたが、それが時に当事者にとっては重いコストとなることは従来十分に重視されたとは言い難い。本研究が示すその実態把握と、継承に向けた種々の工夫の把握は、現在継承にむけ活動する担い手にとり意義ある成果になり得ると考える。

研究成果の概要(英文)：This research seeks to elucidate the adjustments made to accommodate the diverse costs and the motivation for making such adjustments that are engendered by the effort to sustain and carry forward folk culture.

Our findings are presented under the title, *Minzoku bunka no keisho ni okeru kosuto to mochibeshon ni kansuru kisoteki kenkyu* (Basic Research on the Costs and Motivations of Transmitting Folk Culture), and a collation of the materials studied: *Hyakumanben ninbetsucho: Tsugawamachi Shimotamachi. Ninbetsu shogakarihyo. Kansei juichi nen - Keio yo nen* (Hyakumanben Religious Event Records for Tsugawamachi and Shimotamachi, Kansei 11 to Keio 4 [1799 to 1868]). We confirmed that though folk culture appears to have been transmitted at considerable cost in terms of money, human resources, and volunteer activity, those same costs can be perceived as motivating factors for passing folk culture on from one generation to the next.

研究分野：民俗学

キーワード：継承 民俗文化 コスト

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

本研究は、民俗文化の遂行・継承におけるコストを直視し、そこにどのようにモチベーションが関連していくのか、その調整過程を明らかにするものである。文化遺産の一般的認知という社会的背景のもとで、今日の日本では、伝統としての民俗文化の継承は肯定的・好意的に評価される傾向が感じられる。しかしながらその一方で、そうした民俗文化の継承が、当事者に対して要求する負担に関しては、しばしば看過されている面がある。それは民俗文化の遂行自体においても同様である。

民俗文化の遂行・継承は、当事者にとっては準備や用具管理、芸能を演じるための訓練など、多くの負担を強いるプロセスでもある。この負担を「コスト」と呼ぶとして、これらの文化遂行・継承のコストは、科学技術の発達によって低減されることが少ない。何故なら多くの民俗文化は「手作業」や「練習」等に強く依存するためである。加えて民俗文化の母体でもありとされてきた農村の産業構造変化は、継承者を所謂勤め人とも呼ぶ都市部通勤者化をもたらし、その遂行・継承において、たとえば有給休暇の手続きをとって祭礼に参加するというような、農村生活とは異なる新たな種類のコストを要求する。こうした民俗文化における遂行・継承のコストは、むしろ現実の社会生活が様々な科学技術によって低コスト化されていく中で、相対的に高コストな営みになることが避けられない。

しかしこうした民俗文化の遂行・継承が、いかなる当事者負担の下で可能となっているのか、という点は、今日なお十分に明らかとなっていないと考える。したがって本研究の基本的な問題意識は、今後における民俗文化の遂行・継承の可能性を探る意味を含め、当事者が何をどう負担し、そのコストを負うことによって民俗文化がどう遂行・継承されているのかを考える所にある。

### 2. 研究の目的

本研究は、民俗文化の継承について、コストとモチベーションという視角から実態を捉え直すと共に、そこで働く調整過程を明らかにすることを目的とする。その際、経営学におけるモチベーションという概念を手掛かりとしながら、民俗文化の遂行・継承を一つの経営として捉え、どのような調整過程を経ながら民俗文化が遂行・継承されてきたのか、実態調査をもとに明らかにする。

### 3. 研究の方法

本研究では、民俗文化の遂行・継承においてコストを直視し、そこにどのようにモチベーションが関連していくのか、その調整過程を明らかにするものである。本研究はこの観点から、極力広い地域に渡って調査を遂行する。具体的には、研究代表者の石本が新潟県の事例、福島県の事例を研究協力者の大里、埼玉県の事例を研究分担者の渡部、和歌山県の事例を研究協力者の天田、四国の事例を研究協力者の真野、鹿児島県の事例を研究分担者の及川が担当する。

加えて研究代表者である石本は、新潟県東蒲原郡の阿賀野川流域における藁製祭具の調査過程から、阿賀町津川における『百万遍永代帳』について把握し、本帳面を研究上参照できる形にまとめため、久保、村上を研究協力者とした班を用意した。以上広い視野に立って各々調査遂行をおこなう班と、『百万遍永代帳』の読解をすすめる班の二班により本研究は組織され遂行される。

### 4. 研究成果

具体的な研究成果は大きくは研究報告と資料集の作成の二種である。両成果とも定例の報告会を実施し、議論を通し互いの成果の共有と深化につとめてきた。

石本は、新潟県東蒲原郡阿賀町津川の個人宅に所蔵されている『百万遍永代帳』を事例とし、その資料整理と読解を進めた。当帳面は寛政 11 年（1799）から平成 10 年（1998）まで、約二百年間継承されてきた百万遍行事について記されたものである。そこで現在聞き取れる範囲でのインタビュー調査も併せておこない、コストとモチベーションを意識した資料のデータ処理および検討に関する文献の収集と検討を加え、2017 年 10 月 14 日の日本民俗学会年会の発表にてその成果の一端を示した。あわせて、関連した東蒲原郡の事例を元に成果の公表もおこなった。

渡部は、埼玉県越谷市越巻中新田のオビシャ文書について検討を進めた。オビシャ文書は承応 3 年（1654）から現在に至るまで書き進められている膨大な資料群であり、渡部は資料の整理に加えて参与観察を主とした調査をおこなった。上記成果について、埼玉民俗の会の発行する会誌『埼玉民俗』にて公表をおこなった。

及川は、鹿児島県最南の島・与論島の城集落における、与論島の十五夜踊りについて検討を進めた。十五夜踊りは与論町の無形民俗文化財の指定のものに、国の重要無形民俗文化財に登録された芸能である。及川は、当該事例の関連資料の収集と整理にあわせて、参与観察を実施し当該行事の変遷を明らかにすると共に、観光化等の島内外の状況への目配りをおこない検討をおこなった。

大里、天田は 2017 年 10 月 14 日の日本民俗学会年会にて、それぞれ学会発表をおこない、成果の一端を示した。大里は福島県郡山市にある、笹川のあばれ地蔵保存会の活動を事例とし、とくに都市化と新住民の流入による伝統行事の継承に着目し、調査をおこなった。参与観察の実施に加え、行事変遷を明らかにするべく関連資料の収集をおこない、学会発表にまとめた。天田は、「紀伊山地の霊場と参詣道」の構成資産として世界遺産に登録された熊野における、和歌山県の熊野比丘尼の活動を事例とし調査をおこなった。観光ガイドとして活躍する現代の熊野比丘尼たちの活動について、インタビュー調査に加え行政側の対応も視野に入れて調査をおこない、学会発表にまとめた。

真野は、四国遍路に関して現在数多く残されている巡礼巡拝記を事例に、「役柄」という新たな概念の元で資料調査ならび検討をおこなった。とくにソーシャル・ネットワーキング・サービスによる情報交換等の現代のインターネット上における巡拝記などにも目配りをおこない、そのときどきの行動や内面の吐露を掬い取った、四国遍路の捉え直しを進めた。

以上の成果と研究組織内での議論を経て、2019 年 3 月に成果報告書『民俗文化の継承におけるコストとモチベーションに関する基礎的研究』を作成した。本報告書において、民俗の担い手にとり民俗文化の遂行は大きなコストを伴うことを改めて確認し、他方それをモチベーションに変換し継承を遂行する場合があることを明らかにした。

あわせて、研究代表者は、研究協力者である久保康顕、村上弘子と共に、資料集『百万遍人別帳 津川下田町 人別・諸掛表 寛政十一年～慶応四年』を作成した。本研究の調査過程で重要性が確認された史料における、寛政十一年（1799）～慶応四年（1868）の期間の資料のまとめであり、近世における町場の宗教行事について、参加者やその費用面までの実態を詳細に明らかにしたものである。しかし、本帳面は平成 10 年（1998）まで続けられるものであることを考えれば、内容はその最初期のみをまとめたものであり、また内容に関しても幅広い読者に向けて刊行するためにはまだ検討の余地があり、研究上参照できる形での整理にとどまったといえ、明治期以降のまとめと共に今後の課題と言える。

具体的な成果として、以下の論文発表、学会発表等をおこなった。

## 5．主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)

[雑誌論文]

石本敏也「ショウキサマの田圃」(『高志路』401号、新潟県民俗学会、2016年)

渡部圭一「近代移行期の「村の年代記」 - 越谷市越巻中新田のオビシャ文書 - 」(『埼玉民俗』41号、埼玉民俗の会、2017年)

〔学会発表〕(計3件)

[学会発表]

石本敏也「百万遍講の継承 新潟県東蒲原郡阿賀町津川の「百万遍永代帳」を事例として」  
(日本民俗学会、2017年10月14日、佛教大学)

大里正樹「行事の継承におけるコスト 福島県郡山市「笹川のあばれ地蔵保存会」の事例」  
(日本民俗学会、2017年10月14日、佛教大学)

天田顕徳「現代熊野における曼荼羅絵解き コストとモチベーションを手掛かりに」(日本民俗学会、2017年10月14日、佛教大学)

〔図書〕(計1件)

石本敏也「藁の大人形祭祀における記念行為と祭祀の変遷」(由谷裕哉編『郷土の記憶・モニュメント』、岩田書院、2017年)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕

ホームページ等

## 6．研究組織

(1)研究分担者

及川 高(OIKAWA, Takashi)

沖縄国際大学, 総合文化学部, 講師

研究者番号:(60728442)

渡部 圭一(WATANABE, Keiichi)

滋賀県立琵琶湖博物館, 学芸技師

研究者番号:(80454081)

(2)研究協力者

真野 俊和 ( SHINNO, Toshikazu )

天田 顕徳 ( AMADA, Akinori )

大里 正樹 ( OOSATO, Masaki )

久保 康顕 ( KUBO, Yasuaki )

村上 弘子 ( MURAKAMI, Hiroko )

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。